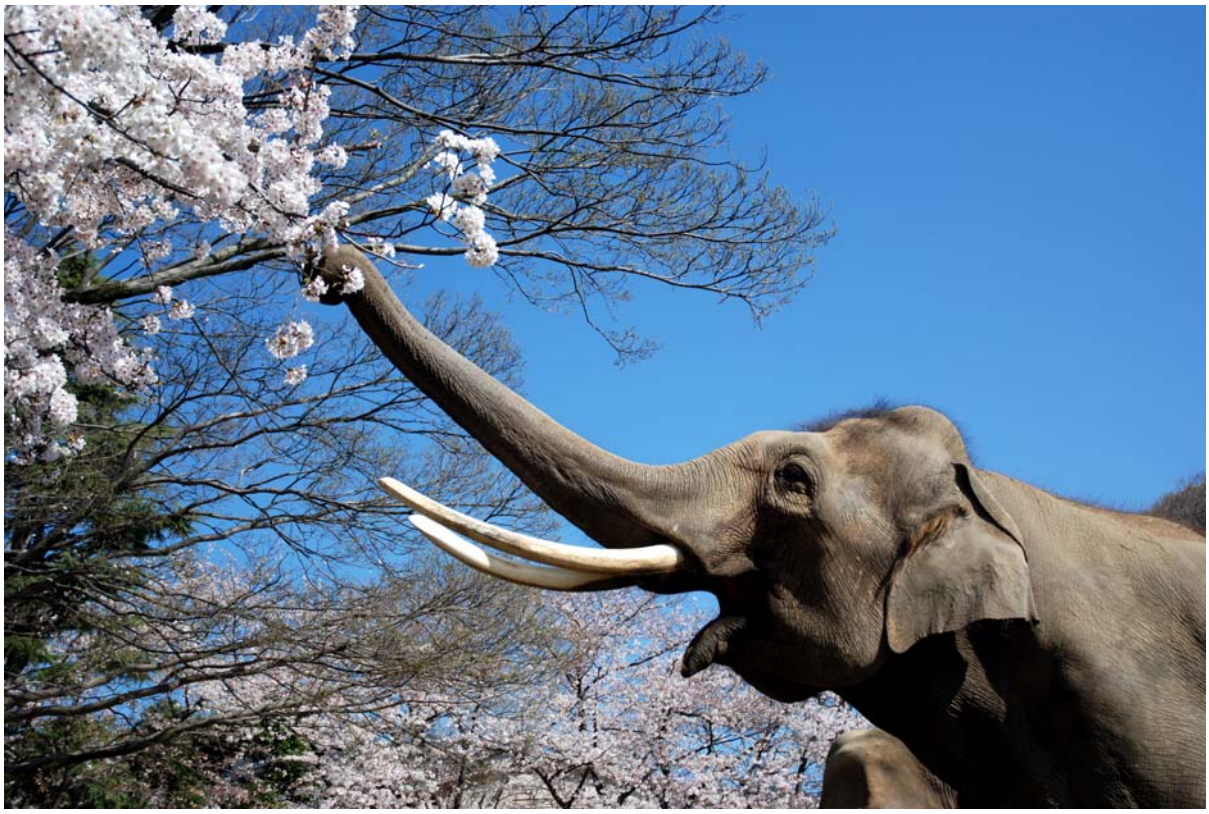
ＫＯＢＥの本棚

－神戸ふるさと文庫だより－

第　70　号　　平成24年3月20日

編集・発行　**神戸市立中央図書館**

〒650-0017神戸市中央区楠町７－２－１ (078)371-3351



王子動物園内の桜　　**（神戸市立王子動物園提供）**

桜のころ

メディアに桜の開花予想が流れると、春の気配もいっそう深まるようです。

昭和二十六年に関東地方を対象として始まった開花予想の基盤となるのは、各地に定められた「標本木」の観測です。神戸の標本木は旧神戸海洋気象台（中央区中山手通）の木でしたが、阪神・淡路大震災によって気象台が移転し、平成十四年以降は王子動物園内「パンダ花壇」の桜の木に変更されました。平成二十二年から開花予想業務は民間に委譲されましたが、気象庁による調査用の観測はつづいています。

桜は平成十二年に「灘区の木」に選定され、灘区では「さくらまつり」など桜に関わる行事も盛んです。『灘・桜回廊マップ』（灘区役所発行）には王子動物園ほか、護国神社、掬星台周辺など三十六ヶ所ものお花見スポットが紹介されています。なかには、桜のトンネルで知られる高尾通の桜のように、大正十四年に摩耶ケーブルが開通したときに街路樹として植栽された場所もあります。

新緑や紅葉も美しい桜。今年はどんな姿をみせてくれるでしょうか。

居留地の街から―近代神戸の歴史探究　神戸外国人居留地研究会編（神戸新聞総合出版センター）

本書は神戸外国人居留地研究会の設立十周年を機に出版され、九編の論文と六編のエッセイから成っている。

平清盛から始まる港町神戸のキャラクター考察、居留地にあった商社をめぐる人々、神戸商業講習所で行われていた教育内容、新聞記事から見える初期近代女子教育の内容や外国人の生活スタイル、西宮神社と東京玄国寺にある岩倉具視旧居をめぐる考察など、居留地を軸として幅の広い論考が並んでいる。

以前発表されたものを増補した論文もあり、神戸居留地に関する最新の研究成果の一端がみてとれる。

Kobe Jazz Street―神戸ジャズストリートの30年　神戸ジャズストリート実行委員会編・発行

毎年十月の二日間、北野町界隈で開催される神戸ジャズストリート。本書はこの三十年のあゆみを写真やはがき絵で振り返る。

ポートピア博覧会のジャズ・フェスティバルがきっかけとなって誕生。国内外から数々の名プレーヤーが参加し、多くの観客を魅了してきた。また、阪神・淡路大震災の年も「ジャズで復興を」とアピールし中断はされなかった。

神戸の熱いジャズ魂を感じる。

図説平清盛　樋口州男ほか（河出書房新社）

平氏関連の書籍は世の中に数多いが、写真や挿図が多い本書は眺めているだけでも清盛の生涯が追える。その上文章も史実と伝説を比較しつつ精緻に綴られている。

平氏発祥から章を立て、関係人物を多く紹介するなど平氏繁栄の時代背景を細かく記している。

また平家物語・清盛坐像・清盛塚を通して後世の人々が捉える清盛の人物像を説くなど、清盛の新たな一面が浮彫にされている。

負けんとき―ヴォーリズ満喜子の種まく日々　玉岡かおる（新潮社）

W・M・ヴォーリズといえば、神戸女学院や関西学院大学の校舎などの建築家として有名だが、来日の目的はキリスト教の伝道だった。この小説の主人公一柳（ひとつやなぎ）満喜子は彼の夫人である。

満喜子の父は華族で、元は三田藩九鬼家から養子として一柳家を継いだ、小野藩最後の大名である。

満喜子は東京で育ち、女子高等師範学校卒業後、神戸女学院で音楽を学んだほか、英語教育を受けアメリカに留学した。帰国後、近江八幡を中心に活動するヴォーリズの手助けをしていたが、満喜子と外国人との結婚には華族令という壁が立ちふさがった。本書は障害に立ち向かった二人の道程を描いている。

夢をかなえる。―思いを実現させるための64のアプローチ　澤穂希（徳間書店）

著者はサッカー日本女子代表メンバーで、ＩＮＡＣ神戸レオネッサ所属の澤選手。「夢をかなえる」ことを軸に、サッカー選手、一生活者としての心構えや習慣を、明るくシンプルに語る。「夢をかなえるためには、夢のレンガを積む作業が欠かせない」。一日一段積めば、夢は「高い壁」ではなく「階段」になっている…。努力を重ね、チームをワールドカップ優勝へ導いた彼女の言葉が心に響く。

絵に生きる絵を生きる―五人の作家の力　島田誠（風来舎）

本を開くと目に飛び込む強烈な絵。著者がその生き様までも含めて惹かれた作家たちの作品である。

前海文堂書店社長で、現在ギャラリーを開廊する著者が、松村光秀・山内雅夫・武内ヒロクニ・高野卯港・石井一男の五人の作品と人生を熱く語った。

一途に描くことのみを考え、自分の魂に忠実な無名の作家たち。芸術と孤独に格闘する姿は、「生きる」ことの意味を教えてくれる。

高校生、災害と向き合う―舞子高等学校環境防災科の10年　諏訪清二（岩波書店）

舞子高校には、震災体験から学ぶ「新たな防災教育」の拠点として、全国唯一の環境防災科が設置されている。同学科の教諭である著者が、東日本大震災被災地での生徒たちの活動とこれまでの十年間の取組みについてまとめた。

被災地を訪れた生徒たちは、田畑や床下の泥かき、写真のクリーニング、仮設住宅での茶話会等の活動を行い、災害の壮絶さに直面する。ボランティアの目的は学びではなくニーズに応えることだが、結果として、人の優しさに触れ、支援する側の心構えを学んでいく。

これまでのボランティア活動も含めて、災害や復興に真剣に向き合う生徒たちの姿が描かれている。

昭和の記念写真―あのころ、私は　神戸新聞社編（神戸新聞総合出版センター）

神戸新聞に投稿された読者からの昭和の思い出の写真を集め一冊にまとめたもの。日々の暮らしや行事、お出かけや学校で撮影された写真の中から、昭和という時代が浮かび上がる。「戦争の影」と題して出征する父や夫と撮影された写真は、最後かもしれないという重苦しい空気さえ伝わってくる。

昭和がブームとなっているが、市民の視点から見た一種の昭和史といえる。

兵庫近代文学事典　日本近代文学会関西支部兵庫近代文学事典編集委員会編（和泉書院）

ちょっと面白い事典である。文学者のみならず、文化人や漫画家なども紹介されている。また、作家自身の略歴だけでなく、作家や作品と兵庫とのかかわりを中心に編集されている。

「神戸とミステリー」「阪神間文化」といったコラムや、県内の文学賞・文学館の一覧も付いている。どのページを開いてもいろんな発見がありそうだ。

＝その他の新刊＝

望郷―姫路広畑俘虜収容所通譯日記　柳谷郁子（鳥影社）

震災キャラバン　高嶋哲夫（集英社）

衝海町　神盛敬一（編集工房ノア）

西行と清盛―時代を拓いた二人　五味文彦（新潮社）

大震災と歴史資料保存―阪神・淡路大震災から東日本大震災へ　奥村弘（吉川弘文館）

書庫探訪　その㉕
『孫中山先生歓迎会名簿』　大正2年（1913）

孫文（号は中山）と神戸はゆかりがあり、有名な「大アジア主義」の講演は、大正13年（1924）兵庫県立神戸高等女学校で行われました。

この『孫中山先生歓迎会名簿』は、大正2年（1913）に来日した際、神戸の常盤花壇で開かれた歓迎会の名簿です。孫文は、中華民国前大統領として長崎へ上陸し、東京や横浜、名古屋、京都など各都市をまわり、神戸には3月13日にやってきました。いくつもの歓迎会に出席し、中華同文学校や川崎造船所への訪問といった強行日程のなか、3月14日夕刻、神戸市有志による歓迎会が明治元年開業の料亭・常盤花壇で行われました。

名簿には、主催者である当時の神戸市長鹿島房次郎をはじめとして、松方幸次郎や滝川辨三、武藤山治といった神戸の財界人たちの名前が並んでいます。また、「歓迎の栞」には、当日の献立と余興が記されており、鯛の刺身や合鴨と大根の炊合せ等といった料理が供されたようです。

ランダム・ウォーク・イン・コウベ⑦⓪

夢野あたり

昔、刀我野(とがの)に牡鹿が住んでいました。この牡鹿には夢野に正妻と、淡路の野島に妻妾とがありました。あるとき、正妻のもとにいた牡鹿は自らの背中に雪が積もり、すすきが生えるという夢を見ました。牡鹿が野島に通うことを嫌う牝鹿は偽ってこれを凶夢だと判じ、野島に行けば船人に殺されるだろうと告げます。しかし牡鹿は恋しさを耐えかねて野島へ向かい、射殺されてしまいました。この故事によってこの野は夢野と呼ばれ、牡鹿の運命は夢占次第と言い習わされるようになりました。

(摂津国風土記 逸文より)

寿永三年(一一八四)二月、一の谷合戦。『平家物語』は、義経が高名な逆落としに先立ち、地元の翁に地形について相談をしたと伝えます。険しき山中を馬では進めまいとする翁に、鹿は通るかと重ねて問う義経。鹿は通るとの答えを得、ならばそこは馬場であろうと結論し、進軍しました。このうち、多田行綱隊はルートを分かち、鵯越を通って夢野へと進み、平家の本営・福原を山手から攻略したと言われています。

福原京は旧湊川の中流域を中心とした地で、大輪田泊の北方、山裾に至る一帯です。清盛のこの地との縁は応保二年(一一六二)、八部郡の公領の領有権を得たことに始まります。清盛はそれを端緒に摂津国西端から播磨国東部に至る広大な地域を領地化しました。仁安三年(一一六八)、病を得て出家した清盛は程なく福原の山荘に居を移しますが、その後も政権を着実に一門の元に掌握させるなど強い影響力を行使し続けました。そして治承四年(一一八〇)、遷都を目論むも半年ほどで頓挫。諸国に反平氏の乱が巻き起こる中、死去しました。

『方丈記』は、福原遷都に際し「その地ほど狭くて、条理をわるにたらず、北は山にそひて高く、南は海近くて下れり」と、新都が傾斜地にある様子を記しています。また、『高倉院厳島御幸記』では、美しい木立に囲まれた清盛の山荘の様子が仙人の住処にも喩えられています。

夢野は、清盛の山荘の西方向、福原京の北西部にあたります。清盛は都の鎮護や大輪田泊の発展を願い、福原周辺に数々の寺社を勧請しましたが、夢野にもそのいくつかが残っています。熊野大神を奉斎した熊野神社(熊野町)、境内からのろしを上げて新都の位置を計測し、八幡大神を創祀した夢野八幡神社(氷室町)、篤く信仰する安芸の厳島神社を勧請した七弁天のひとつである氷室神社(氷室町)。これら山の手の神社からは、福原京から大輪田泊まで見渡せたことでしょう。

氷室神社の創建年は明らかではありませんが、『日本書紀』にある、仁徳天皇の異母兄・額田大仲彦(ぬかたのおおなかつひこ)が狩の途中で発見した氷室に由来するとされます。福原遷都のとき、付近には平教盛邸があり、後白河法皇が入った屋敷と伝わります。そして一の谷の戦いで平家の山手の陣が敷かれたのもこの辺りでした。

清盛の死後、一門は激しさを増す反勢力軍の追討に追われます。幾度もの戦いを経て、寿永二年(一一八三)、旭日の勢いで京へと攻め上る木曽義仲の前についに都を明け渡し、福原に逃れます。しかし懐かしむ間はなく、翌朝、既に荒廃し往事の姿を失くした旧都に火をかけ、さらに西国へと落ちゆきました。

大宰府を経て屋島へ入った平家は数ヵ月後、勢力を回復し、頼朝による義仲討伐など源氏の内部闘争の隙を衝いて再び福原へ戻り、入京の時を窺います。清盛の三回忌を営もうとし、和平の使者を待てとの後白河法皇の院宣を受けて待機する中、攻め込まれました。一の谷の戦いです。

東の生田の森、西の一の谷、北の山手。三方から源氏は攻め寄せました。夢野で山手を防備したのは平教経。平家一の猛将とされた人物です。しかし奇襲を受けて敗走。これが戦況に大きく影響し、大敗した一門は海へ逃れます。この後、戦いは西海へと展開し、平家が福原へ戻ることは二度とありませんでした。

源平の争乱で福原京は焼失しました。しかし山手に残るゆかりを散策し、市街を経て遠く広がる海まで視線を巡らせるとき、この地で清盛の見た夢を追想せずにはいられません。

平家が福原を落ちる朝、鹿の鳴く声さえ名残惜しく、人々の心を締め付けました。この鹿の音を、清盛も聞いたでしょうか。

参考文献
『地域社会からみた「源平合戦」』岩田書院 ほか

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

神戸市広報印刷物登録 平成23年度第112-3
(広報印刷物規格 B-1)